



# 男は 痛い



國友万裕

第39回

『さくら』

## 1. スポーツ、学歴、東京

ボクシングを始めて半年が過ぎた。チケット会員なので、月に1回から2回だけのことから、本格的にやっているわけではない。しかし、着々と上達はしている。トレーニングの時は最初に縄跳びをするのだが、連続して127回跳べるようになった。プロの人たちは無限にでも跳べるので自慢できる回数ではないが、最初の頃に比べれば上達している。ボクシングは3分と30秒刻みのデジタル時計に合わせて、練習をしていく。3分間トレーニングをして30秒の休憩。そしてまた新たな3分が始まるのだ。もっとも俺の場合はただのエクササイズなので、途中大きく休憩をとりながら、やっていくことになるのだが、3分は連続してやっていかななくてはならない。この3分が長く感じるのだった。しかし、多少はしんどい思いをしなければ成果は出ない。着々とステップは覚えてきて、どうにか練習についていけるようになった。インストラクターの若いお兄さんが、「先生、男前ですよ」と言いながら写真を撮ってくれた。彼がSNSにアップした写真を見ると確かによく撮れている。男前ではないが、アラ環のおじさんの割には精悍で、悪くない。

思えば、21歳の頃から、水泳教室は20年くらい通って、泳ぎは普通の人よりもできる。若い頃は一眼見ただけで運動神経が鈍そうに見られたのだが、今はそうでもない。むしろ、ラグビーとか柔道ができそうな人に見られる。しかし、悲しいことに俺のスポーツコンプレックスはなかなか抜けない。若い時代に毎日刷り込まれた呪われたメッセージは、おそらく死ぬまで消えはしないのだ。

今の若い子達は、中学高校でクラブにいることを奨励されるらしく、運動部に入っている男子が多い。野球とサッカーが双璧みたいだ。うちの従妹の息子は高校でバレーボールをやっていたのだが、その彼が高校を2年間で辞めて通信制の高校に移ることを、先日母から知らされた。「あなたと

同じ道を歩むことになるのよ」と電話で母に言われ、やはり不登校になるのは血筋なのか、こんな血を継いだ自分を恨むなあ一と思ったものだった。俺の母方の家系は繊細系が多いので、なかなか社会に適応できないのだ。しかも適応できないのは男子ばかり、男に生まれたことも貧乏くじである。

一方で、女性たちは強かに生きている。埼玉に住む従弟の娘もこの春から高校3年生なのだが、彼女は優等生で姉御肌。通っている高校も予備校のような進学校。それこそ最高峰のランクの大学に入ろうとしているらしい。来年の春には、早稲田に受かった、東工大に受かったと言っている姿が目につく。その時に嫉妬に囚われないように今から心の準備を固めなくてはならない。俺だって女に生まれていたら、一生懸命勉強して最高ランクの大学に入ることにはできたのかもしれない。しかし、俺は男であるが故にそれができなかった。男であるが故に傷ついて、勉強に熱中することができなかったのだ。これは言い訳にしか聞こえないだろうが、高校に行かなかった俺が、早稲田や東工大に入ることは至難の業なのだ。

「スポーツ」「学歴」「東京」、これが俺がこだわってきたことだった。俺の親父はある私立大学を8年かけて卒業している。なぜ、8年かかったかという親父はどうしても国立大学に行きたくて、何年も仮面浪人していたのだ。しかし、結局は受からずじまい。そして、その挫折感を一生消化できないまま亡くなった人だった。この親父から、俺は「学歴」へのこだわりという遺産を受け継いだ。俺の場合は国立大学というのではなく、東京の最高峰の私立大学という夢を子供の頃は描いていた。しかし、学校に適応できず、毎日憂鬱な気持ちで過ごしていた俺は、不登校になり、大学どころではなくなった。1年、予備校に通ったがそれでは挽回できないハンデを背負ってしまったのだ。

世間の人には人の事情には鈍感だ。だから、高校生が一生懸命受験勉強するのは当たり前と思っているので、さまざまな事情があっても勉強できな

ったと言ってもわかってくれない。それは言い訳、みんな条件は一緒だと決めつけてしまっている。

とは言っても、それは昔の話だ。従弟妹の子供たちと俺とでは40歳も違っている。俺より40も年上の人となったら大正生まれだ。その時代に生まれた人と夢や価値観を分かち合うことは俺だっでできなかったはずだ。時代が違っていることは歴然としていて、今の若い子と学歴のことを比較する俺が間違っている。

昔と今とでは不登校もわけが違っている。従妹の息子は先生たちからいっぱいサポートしてもらい、理解してもらったものの、どうしても出席不足で単位をもらえない授業が2つほどあって、それで通信に移る。それまで取った単位は通信で認定してくれるので1年あれば卒業できることだから結果的には変わらない。従妹の息子が学校を辞めることが決まった後、友達が泊まりに来たり、みんなで送別会をしてくれたりと決して昔みたいに白眼視されるような不登校ではない。彼は高校を辞めた後、寿司屋でバイトを始め、そのお金で大学に行くと言っているらしい。従って、ただ単に学校が嫌いというだけのことで、引きこもりというほどでもないのだ。

従妹はシングルマザーで、彼女の父親はとっくに亡くなり、母親もボケて入院中。頼る術がないので、何かあるとうちの母に頼ってくる、それが憂鬱だった。しかし、母は、「誰でも面倒見れば、いつか自分も面倒を見てもらえるのよ。あなたも貰い子でももてるようになればいいわね」と考えている。母は人の世話ばかりで生きてきたような人だが、考えてみると母は頼られるのが好きなのだろう。

俺が養子をもらおう??? 伊藤公雄さんの説では、「父になること」が男たちの悩みの解決策とのことである。実際の父でなくても、誰かの父がわりになることが、俺のトラウマを癒してくれるのだろうか。

確かに俺は父と息子の関係に憧れる。俺がアメリカ映画が好きなのはそれも一つの理由だ。アメ

リカ映画では、父親、もしくは父親的人物と若い男性の物語は枚挙にいとまがない。『セント・オブ・ウーマン』『ハスラー2』『フェイク』『モリー先生との火曜日』・・・これだけそういう話が出るのは、父息子の関係に憧れる男性がそれだけ多いからなのだろう。若い頃の俺は、当然のことながら、息子役の方に感情移入をして映画を見ていたものだった。しかし、考えてみるとこの頃は父親を憧憬することはない、年齢的に息子の方を憧憬する歳になってしまっている。

俺も、誰かに息子代わりにしてもらうのがいかもしれない。元教え子に野球ができる子がいるので、「今度、キャッチボールを教えてください」と話した。「了解です」と彼。しかし、その後、「野球ができんくらいがコンプレックスなんですか（笑）」とも言われた。子供の頃から難なくスポーツができた彼からしてみれば、それくらいのことをコンプレックスと思わなくても思っているのだろう。

人間千差万別、悩みは違っている、受け取る感受性も違っている、生きる時代や環境も違っている。人の悩みを公正に判断することなんて、誰にできるだろうか。

彼は礼儀正しい好青年で、偏見もなく、清潔感のあるいい子だ。彼とキャッチボールができるようになればスポーツコンプレックスがひとつ解消する上に、息子とキャッチボールをしているという理想的な構図が生まれる。その写真をインスタに出せば、親子とってくれる人もいるかもしれないのだ（笑）。

## 2. 天の父と繋がること

この春から教会にも通い始めた。プロテスタントの牧師さんとは3年ほど前からお付き合いしているのだが、その先生の教会は大阪である。日曜日毎に大阪まで行くのは流石にしんどい。去年はコロナということもあって、1年ほど礼拝にはいっていなかった。そんなおり、京都で絶好の教会

が見つかったのだ。これから本格的にクリスチャンになりたいと思っていた俺には絶好のチャンスだ。

ただネックはお金だった。ネットで調べると十一の献金と書かれていて、キリスト教の信者の人は収入の10分の1を献金するのだそうだ。それは流石に痛い！もちろん、それは強制ではない。むしりとるようなことをしたらそれこそ悪徳宗教である。牧師さんに尋ねたところ、真のクリスチャンの人はそれだけのものを信仰から得ていると感じているので、それを払うことも高いとは感じないとのことだ。それにしても痛いなあ～しかし、京都の教会で話を聞いてみると、「そんなお金とりません」とのこと。他の牧師さんやクリスチャンの人たちにも尋ねたのだが、十一の献金をするのは特別な地位にいるような人で、普通はそんなお金は出さないのだそうだ。また教会によって開きがあるらしい。

確かに礼拝では何も献金のことは言われない。普通、日曜日の礼拝では袋が回され、そこに礼拝のためのお金を入れる。これはほんのわずかな額で構わないのだが、今はコロナ禍なので、袋を回すことができなくなっていて、いつでも好きな時に礼拝金も振り込みで払えばいいとのことだった。俺は5回ほど礼拝に出席したので、1回千円と計算して5000円振り込んだ。早速、その後の礼拝で、「國友さん、ありがとうございました」とお礼を言われた。

礼拝で説教をしてくださる宣教師の人の中にはまだ若い大学院生の人もいて、彼とはすぐにFacebookでつながり、何か疑問がある時は彼にメッセージで質問すれば返事が来る。週に1回1時間だけ。しかも日曜日の午前中だけというのも嬉しい。午後だとせつかくの日曜日が1日潰れてしまう。時間を有効に使えるのだ。

アメリカ人が父と息子にこだわるのは、おそらくキリスト教が理由である。キリスト教の場合は、父なる神とキリストという構図なので、それがさまざまな物語の原型になっている。アメリカに行

ったときにつくづく思ったものだ。アメリカは広い。これだけ空が広ければ、当然、空にいる神を身近に感じながら生活することになるのである。

### 3. 女性嫌いは克服できるのか？

先日、ボクシングジムで、バーベキューパーティーが行われ、他の会員の人たちとも交わる機会があった。昔だったら、こういう体育系の男性が圧倒的な席は苦手だった。しかし、今は同年代のおじさんとも若い男の練習生とも自然な形で交われる。「俺も男になったなあ」と思って、嬉しくなったものだ。

毎週家に来てくれるマッサージの人からは、ビンタ動画を撮りましょうよと言われた。軽く冗談ですのかと思い、顔を向けたら、バシッと目一杯のビンタが飛んできた。顔が赤くなった。俺がビンタされるのを彼がもう一方の手で録画していたのだが、音までバッチリ入っている。俺が「いてえー」とのけぞるところまでバッチリ動画に収まった。それをインスタにあげたのだが、これが意外に好評で普段はいいね！をくれないような人からいいね！が来た。

そんなわけで、この頃自分の中の男がウズウズしている。これからは男の攻撃性を強めよう。俺は自分の中に男の本質が存在していることは自覚している。俺は男か女かわからないと言われるが、同一性障害ではないのだ。ただ、話が女の子の話に及ぶと居心地が悪い。俺は女性恐怖なので、その部分で他の男たちと経験を共有できないからなのである。

俺は何人ものカウンセラーについてきて、自分の女性恐怖の原因が生育と深く関わっているということはわかっている。俺は子供の頃、周りに同年代の男の子がいなかった。弟は歳が10くらいはなれていたの遊び相手にはならなかった。学校でもスポーツができなかったため男の子のグループに入れられない日々が続いた。そのことで俺は男のアイデンティティを築くことに失敗してしまっ

たのだ。父は悪人ではなかったが、母に頼りっきりの人だった。育ったのは九州の地方都市でも男尊女卑。しかし、何度も言うように男尊女卑はむしろ男子にプレッシャーをかけるための装置であることを俺は感じ取っていた。俺は男に同一化したいという気持ちはあったものの、同一化できるタイプの男性が周りに存在せず、さらに男に同一化してしまったら、女性の術中にはめられるという抵抗もあって、ずっともがいて、15歳で心が壊れたのだった。

最近、吉永小百合が若い頃に主演した『草を刈る娘』（西川克己監督・1961）という映画を見た。石坂洋次郎の原作ものである。ここでまだ生娘のヒロインがおばあさんに尋ねる。「男と女ってどっちが強いのか？」「そら、男だね、、、」とおばあさんは一旦答えた後、しばらく間をおいて、「いや、本当は女の方が強いんだよ。だけど、そのことを男に気づかせちゃいけない。男の方が強いんだと見せかけて、女はグッと男の手綱を掴むんだよ。私は男みたいな子供が産めない生き物になって、絶対なりたいとは思わないよ」と語る。

これは東北が舞台で、九州の話ではないが、俺が少年時代に目撃した九州の女性たちは少なからずこうだった。表向きは男性優位に見せかけて、実権は女性の方が握っていたのだ。「女は損、女は弱い、女は無力、だから何もできない、だから男の人頑張って、強くなって、、、」とプレッシャーをかけ、男をコントロールする。強かで、ずる賢い女たち。男は女たちに踊らされているのだが、ほとんどの男はそのことに気づいていないのだった。

俺は、中学で女子からの壮絶ないじめを受けた。高校には行けなくなり、やっと立ち直って、前向きな気持ちで大学に入学したのに、大学で受けた女子からの白眼視と甘え。女性嫌いは悪化した。俺はもう女性恐怖症を治すのは諦めようと開き直って、その後の10年くらいは引きこもって過ごした。30近くになってやっと引きこもりから這い出し始めたので、それまでのトラウマを共有したくて男性運動の場に参加した。しかし、ここでは確

執が起きた。運動に絡んでいる男性たちは、フェミニストの影響を受けているため、普通の世界以上に女性を批判するようなことは口にできない。俺は女性からトラウマを負わされているのに、それに対して愚痴をこぼすこともできない、女性を批判するようなことを口にしようものなら、「それはあなたが女性を下位のものと見做しているから、女性から些細なことをされたことが許せないのだ」と男尊女卑の女性差別主義者のレッテルを貼られてしまう。これでは余計に鬱憤が溜まってしまう。

アメリカでは MGTOW という男性運動が起きていて、すでに何冊も本が出ている。これは、Men Going Their Own Way の頭文字をとったもので、結婚や恋愛など女性との付き合いは男性にとってマイナスだから、それを避ける、他のことにエネルギーを注ぐ男性たちのことである。「おー、俺と同類項の男たちはアメリカにはいたんだ!!!」と嬉しくなったものだ。ちなみにアメリカには女性と付き合えないために女性を憎悪する過激な集団インセルも存在している。日本でも、そこまで過激ではなくても女性と付き合えない男性は刻々と増えているとは言われている。俺は異常ではないのだ。

俺は漬物が食べられない。ただ、食べられないというだけではなく、近くに置かれるのも嫌なくらいに嫌い。子供の頃からなのだが、小学校の6年の時、家庭科の調理の時間に無理に食べようとして吐きかけたことがあった。それ以来、もう絶対に食べないし、食べる努力もしなくなってしまったのだ。

女性の場合もそうだ。俺は何度も女性から痛い目に遭わされ、トラウマを負わされている。それでいつの間にか女性と友人として付き合うのも嫌になっていき、女=敵、女=精気を吸い取る魔女という固定観念が頭にこびり付いてしまったのだ。そういう女ばかりではないことがわかっていても、人間ってそんなものなのではないか。

俺の周りには胸を取りたいという女性は何人もいる。それは恐らく、彼女たちの子供の頃のトラ

ウマが原因しているのだと思う。おそらく女であることを憎んだような経験を彼女たちはしているはずだ。しかし、そのトラウマを治す治療法があるのだろうか。もちろん、カウンセリングを長年受けて、ほぐしていけば、いつか女性であることを受け入れられる日が来るのかもしれないが、そのためには莫大な時間とお金がかかる。必ず治るという保証もない。俺の女性嫌いもそうなのだ。治す方法がないからそのままの状態になっている。

しかも、運命は皮肉だ。俺は、漬物が嫌いなのに京都に来てしまったが、女性が嫌いなのに英文科を選んでしまった。大学に入るまでは、先の先まで深くは考えなかったのだった。そのことが見事に裏目に出たのだった。なぜ、こんな運命を生きることになったのか……。これが俺の宿命、俺が神様から与えられた人生の宿題なのだろう。

これまで書いてきたことは何回もこの連載で訴えてきたことだが、俺はあえてそのことを繰り返す言わなければならない。中島みゆきの歌と一緒に。彼女の歌は全てテーマはワンパターン、夢は叶わない、男は自分を愛してくれない、心の傷は癒せない、それを歌い続けて50年近く人気をくしている。俺は彼女のような伝説的なスターにはなれないが、しかし、長く繰り返し、同じテーマを語っていれば、きっと気づいてくれる人はいるはずなのだ。

もちろん、承認される日は遠いだろう。3冊目の単著が出てからちょうど1ヶ月経ったが、まだ何も反響はない。今回は授業で使うためのテキストとして書いたもので、一般向けではないし、ポリプロピレン加工で、横書きである。全て、省エネのための手段だ。これでどうにか俺の思いをわかってくれる人がいればいいのだけれど、おそらくほとんど誰も読まないだろう。

しかし、あえて、もう一度前向きになろう。♪ ビリーブアゲイン、無くすものさえない今が、強くなるチャンスねー♪と昔、浅香唯が歌っていた。自分の全てを分析し尽くして万策尽きた今が自分

を変えるチャンスだ。

重大決心として、これからは規範から入ろうと思っている。これまでの俺は規範を全て脱構築したかった。しかし、それだと男になれない、女性との付き合いもできない。ジェンダーやセクシュアリティを脱構築してしまったら、おそらく全ての人は男でも女でもなく、同性愛でも異性愛でもなくなってしまうだろう。性は結局つくられるものなのだ。

これまで脱構築して何十年も生きてきたから、これからは構築して生きていこう。規範に沿って生きていこう。そうすれば、意外に新しい世界が見えてくるかもしれないのだ。幸い、春休みに受けたミニドッグの結果は悪くなかった。鍼灸の先生からも「國友さんの場合は、神経の昂りが問題なんです。体はそぞていないからまだバリバリに働けます」と言ってもらえた。鼠径ヘルニアも心なしかましになってきている。

まだまだ人生は長い。まだ人生があるうちに女性恐怖症にも何らかの解答を出すことはできるかもしれないのだ。

#### 4. 『さくら』(矢崎仁司監督・2020)

『さくら』という映画を見た。

これ、今人気絶頂の吉沢亮と北村匠海が兄弟役を演じている。二人とも俺の基準で見ればたいしてイケメンだとは思わない。「俺は、真剣佑はイケメンだと思うんだけど」と学生に話したら、「先生は男らしい顔の人をイケメンだと思っているんですよ。この頃は中性的な、男か女かわからないような顔の人が受けるんですよ(笑)」と言われた。

なるほど、確かにこの頃の俳優さんは昔みたいに男らしく、目的に挑むという顔はしていない。むしろ、ぼーっとしたような顔で写っている。世の中、先行き不透明だし、目的に向かってアグレッシブに生きるなんてことはできないのだ。ものの30年前は「24時間、戦えますか」というCMが流れていたが、今はそんなCM流したら、過労

死が出るとクレームが来るだろう。

(ここからはネタバレ注意!!!)

この映画は大阪の住む家族を描いている。お父さん役が永瀬正敏、お母さん役が寺島しのぶ、妹役が小松菜奈。家族の中は良くて、理想的な郊外族の家族だ。そこで、吉沢が演じる兄はスポーツマンでイケメンのモテ男なのだが、ある日事故に遭って車椅子の生活となり、顔も半分が崩れてお岩さんのような顔になってしまう。家族からは変わらぬ愛を注いでもらえるのだが、人生に希望をなくした吉沢は自殺してしまう。

この部分はとても意味深だと思ったものだった。

体が不随になることは、昔から去勢のメタファーとされている。これから男としてやっていかれないという絶望のメタファーだろう。しかし、車椅子の人は世の中に大勢いるし、これだけだったら自殺とまではいかないような気もしなくはない。むしろ、イケメンの顔が崩れたことが自殺の引き金と言えるのではないか。

それまで女性からうっとりされるような綺麗な顔の男が突然目を背けられるくらいの顔になってしまうことは大きなショックであるに違いない。昔は、顔が崩れてショックを受けるのは女性だったけど、今は男だって顔は大事なのだ。観客の方も、吉沢のイケメン顔が崩れるところはこの映画で最もショッキングな部分である。

この映画、北村と吉沢が二人で自宅のお風呂で背中を流し合う場面も出てきて、BLみたいな雰囲気も漂っている。今は男も綺麗でなくてはならないのだ!

『さくら』では、北村扮する弟は、兄の死の後東京の大学に進むことになる。大阪の人は、普通は京阪神の大学に通う人が多いのだが、この映画では東京へ行くことが彼の新たな旅立ちになる。大勢の人がいるところで「一人ぼっちになりたい」というのが彼の希望である。大阪であってもたくさん人がいるのだが、東京はまた別のイメージがある。

『さくら』では登場人物たちが大阪弁を使う。

例えば、『僕は明日、昨日の君とデートする』は京都を舞台にしているにも関わらず、誰一人関西弁を喋らないのだが、この映画の場合は、あくまでも地方という空気を出すために関西弁を使っているように思える。東京弁は標準語だけど、大阪弁は関西に住んでいる人でないと話さないだろう。東京とは対照的に大阪は地方であることを物語る部分だ。

『ここは退屈迎えにきて』（廣木隆一監督・2018）は、地方都市（富山）を舞台にかつては東京で暮らしたこともあるけれど、地方に戻ってきた若者が、悶々と生きていく姿を描いている。この映画が強調するのは東京と地方の断絶である。『あのこは貴族』（岨手由貴子監督・2021）を見ると、東京は広い、貴族のような上流の人がいることに驚かされる。

俺だって、20年ほど前、真剣に東京に行くことを考えたものだった。あの頃は生活が本当に苦しかったし、男性運動グループとも決裂した直後でトラウマ状態だったので、過去を全て精算して、東京でやり直したいと本気で思った。東京は、東京で暮らしているだけで東京という街を共有しているような気持ちになれる。故郷を捨てた人たちが、東京に集う。東京は様々なバックグラウンドの人を飲み込む街なのだ。俺は東京に行くたびにその思いを新たに、今でもワクワクするのだった。

しかし、俺が今更、東京にうつるということはありません。東京は今でも憧れるが、もう俺はかれこれ38年も京都で暮らしているのだから、京都に根が張ってしまっていて、仕事も人間関係も全て京都に固まってしまっている。俺が一番長く暮らした街は京都、正確には京都の中京区ということになるのだ。

校條剛さんの『にわか京都人宣言』という本を読んだ。これは東京で暮らしていた筆者が、京都の大学で仕事することになり、単身赴任となった際の京都観を語るエッセイである。

京都暮らしの長い俺にはこの本に書いてあるこ

とは本当によくわかる。「京都は街が狭い」「京都は共産党支持が強い」「タクシーや自転車がものすごいスピードで走る」「京都はレトロな飲食店が多いが、それほど美味しいわけでもない、レトロな雰囲気を楽しむためのものだ」、なるほど当たっている。

ただクエスチョンマークだったのは、京都は、地方出身者で故郷に帰りたくない人がいくつ、東京と似た一面を持っているという考察だった。うーん、俺はまさにそういうタイプだが、全体から見れば、京都にいくつ地方人は少ないようにも思える。東京は3年も暮らせば東京人だろうが、京都は一代で京都人になるのは無理だと言われる。京都人にとっては先の戦争は応仁の乱なのだ。そもそも京都は就職先は少ないので、学生たちは卒業すると東京や大阪、名古屋などに散っていくように思うのだが、これは俺の偏見なのだろうか。

ただ、校條剛さんの場合は芸大である。京都は文化的な街なので、芸大系の学生だったら京都にいくつのかかもしれない。あるいは大学に入る目的できた人ではなく、他の事情で流れ着いてきた人は京都にいくつのかかもしれないのだ。京都はインテリ貧乏みたいな人が結構いるので、我が道を行く社会不適應者には住みやすい場所なのだろう。その意味では、俺にぴったりの街だ（笑）。

俺はこれからも京都で暮らすことになるだろう。かつては大阪の大学にも教えに行っていたが、今は全て京都の大学の仕事ばかりになった。大学や家の近所の飲食店の人たちとはすっかり顔馴染みだ。電気屋さんとは30年の付き合い。かつて通っていた水泳教室にはしばらく通っていないが、今でも古顔の先生は俺のことを覚えているだろう。通っている教会、心療内科、ボクシングジム、会員となっているミニシアター。何もかも京都だ。

東京を求めていた俺が、40年近くたって京都に自分のアイデンティティを見つけようとしている。思えば、長い道のりだった。人生は短いようで長く、長いようで短い。「学歴」「スポーツ」「東京」に囚われてきた俺の人生は、当初の理想のままに

は行かなかったけど、どうにか形を変容させて、それと近いラインに届きつつあるのかもしれないのだった。今、俺の人生は起承転結の転の後半まで来ている。あとはエンディングをどう描くかである。